長い午後

女子刑務所の日々

早瀬圭一

長い午後

早瀬圭一

長い午後
女子刑務所の日々
定価九八〇円
昭和五十八年二月二十五日 第一刷
昭和五十八年九月三十日 第二十六刷
著者 早瀬圭一
編集人 川合多喜夫
発行人 関根望
発行所 毎日新聞社
〒一〇〇 東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇 名古屋市中村区名駅
印刷 中央精版
製本 大口製本
©早瀬圭一 一九八三 〈検印省略〉
Printed in Japan

長い午後

女子刑務所の日々

目次

序章＝取材ノートから　7
罪名・殺人＝姑殺し　25
第一日、独居房
絶対的な家長のもとで
二度の自殺未遂
忍従八年の決算
女子刑務官たち I　85
罪名・殺人＝子殺し（無理心中未遂）　102
店員と客
未熟児の出産そして離婚
子連れホステスとして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

罪名・覚せい剤取締法違反・麻薬取締法違反　160
二人の所長　174
女子刑務官たち II　190
罪名・殺人＝夫殺し　206
腰ヒモと殺意
三十歳の崩壊
その夜——
終章＝取材ノートから　230

装幀　櫻井　昭治

長い午後

女子刑務所の日々

序章＝取材ノートから

浅草から東武電車の快速に乗って一時間二十分、新栃木で降りて、タクシーで約二十分行った関東平野のだだっ広い河川敷跡に栃木刑務所がある。

市内の中心から引っ越して年数を経ていないせいもあるが、建物全体は明るく、敷地内の、所長、幹部及び一般職員の住宅まで含めて大きな工場といった外観である。想像していたような門も見張りの看守も立っておらず、いきなり玄関に車を横づけすることが出来る。「路傍の石」の山本有三や吉屋信子を生んだ栃木という町に足をふみ入れるのがはじめてなら、女子刑務所を訪れるのも、まったくはじめてであった。

所長室で所長の渋木多喜子、総務部長・渡辺亥之介、管理部長・保井友三郎の三人に会う。後日、ずっと後になって、取材が順調にすべり出してからは、この三人とも打ちとけ、気心も通じるようになるのだが、初対面の日から何度かの訪問は、押し問答の繰り返しに終始した。

「運動会やバザーなどの催しを地元の方に取材していただいたことはありますが、何十回もの連載は前例もないし、第一そんなに書くようなことはありませんよ」

総務部長の渡辺は、そう言って首をかしげた。書くことがあるかどうかは取材してみなければわからない。総務部長は、しきりに前例がないという。こちらは前例がないからやってみたいのだ。押せば何とかなるのではないか。内心、そう楽観していた私の考えが甘いことを思い知らされる。

昭和五十六年十月の中旬だった。夕刊（毎日新聞）一面下のノンフィクションシリーズ担当の編集局次長・石川泰司から「女子刑務所のルポをやれないだろうか」と打診された。五十六年は、ハチの榎本三恵子（田中角栄秘書官・榎本敏夫の元夫人）の派手な言動や、三和銀行・伊藤素子のコンピューター犯罪が世間の注目を集めた年である。花柳幻舟の受刑体験なども関心を呼んでいた。石川の頭の中にそんなことも浮かんでいたのであろう。私は、むずかしくは考えずに引き受けた。この段階では、石川も私も、栃木刑務所だけを頭に描いていた。さっそく栃木に電話を入れ、所長に会いたいと申し入れた。

ノンフィクションシリーズは、夕刊一面の下に、横に細長く、新聞小説のようなレイアウトをほどこした連載ものである。単にレイアウトだけでなく、内容も小説のような手法で事実を描いていく。普通の新聞記事とはかなり異なる。こちらが意図したような突っ込んだものが果たしてやれるのか。仮に取材可能だとしても、どの程度までなのか。受刑者へのインタビューは？　所長から第一線で働く看守まで、女子刑務官の実態も、プライバシーまで含めて是非とも知りたいところである。

先にも書いたように、所長に会って取材意図を話せばなんとかなるだろうとたかをくくっていた。押せばなんとかなるだろうと思うのは、新聞記者の悪いくせである。十一月初旬、はじめて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

栃木刑務所を訪れて、私は総務部長・渡辺のかたいガードに押し戻された。総務部長は、融通がききそうもないので所長の渋木に向かってしきりにかき口説いたが、こちらも首をかしげるばかりである。管理部長は黙ったままだ。その年の夏、新潮社から刊行したはじめての本「長い命のために」を三人に渡した。ノンフィクションとは、どのようなものなのか、その手法を知ってもらいたいと思った。「長い命のために」は、私の個人的体験にもとづき、老人問題をテーマにしたノンフィクションである。女子刑務所とは内容もテーマも違うが、人間をあたたかく見つめるということでは、根底は同じである。同じでなければならない、そう思っていた。

栃木通いがはじまった。

そんなある日、NHKが朝の「ニュースワイド」（総合テレビ月―土曜午前七時―八時十二分）で栃木インタビューをやることを知った。放送の数日前だった。当日、私は、早目に起き出してテレビの前に座り、念のためにビデオをとりながら、画面に見入った。偶然なのか、意図したのかインタビューは雨の日だった。初冬の雨に煙る栃木刑務所の長く続く塀。しずくをしたたらせる花一輪のアップ。受刑者があらわれるのを待つ緊張したアナウンサーの表情。画面にかぶせる余計な説明はない。受刑者とインタビュアーが対等の立場で語り合っている。

子殺し懲役六年の弘子（仮名・二十七歳）と向き合う山根基世アナウンサー。時間はすぎていくが、その間、弘子は、一度も山根の目を見ようとしない。そんな弘子にいらだって、アナウンサーは、身を乗り出し、「事件」について具体的に聞いた。

「冬の……時間はいつごろです」

「夕方です……」

「晩ごはんより前ですか」
「そうです」
「最後に……お子さん何かおっしゃいましたか」
「最後にですか。……やはり私の名前を呼びました」
「子供さんに手をかけようと、殺意を抱かれたのはいつごろからなんです?」
「事件の数日前です」
「数日前に何があったんです?」
弘子は、うつむいて答えようとしない。沈黙が続く。耐えかねて重苦しい空気を破ったのはアナウンサーの方だった。
「殺意を抱かせる具体的な誰かの言葉とか、犯行を思いたつ何かがあったのですか」
返事はない。
「恋人がいらっしゃったとか伺ったのですが、事件の前ですか後ですか」
「前です」
「事件と何のつながりもないのですか、その人とのことは」
「ないです」
「事件について、恋人に何か話しましたか」
「話しませんでした」
「その人と一緒になりたい気持ちはなかったのですか」
ふたたび弘子は口を閉ざす。

「ああなるには、あなたを動かす何かがあったのだろうと思うんだけど、それを話してもらえないかしら」
「それ……ちょっとかんべんして下さい」
「それまでは、すごくかわいいと思って育ててこられたんでしょ――。やっぱり話してもらえないでしょうねえ。すみません。ごめんなさい」
「大事なとこを言えなくて申し訳ありません」
時間はとっくに過ぎていた。
アナウンサーは立ち上がって深々と頭を下げた。背中を向けて立ち去ろうとする弘子に向かって、彼女は、たまらずもう一度声をかける。
「いまも言えない？　ほんとうのところどうなんですか。ほんとうに恋人と子供さんとのこと、関係ないんですか。一緒になりたかったんでしょ」
「ありました。子供がいると邪魔になるという気持ち、ありました」
「いま恋人に会いたい？」
「会いたくありません。もう何とも思っていません」
「いつから、それは……」
「事件のときからです」
インタビューは、窃盗、夫殺し、子殺しの順で行われた。
正味十七分間、ほとんど息をつめるようにして見た。無駄をそぎ落とし、素材のみで構成した印象に残る番組であった。映像は強い。文字をつらねて、テレビを越えることが出来るだろうか。

越えなくともよい。なんとか肩を並べるようなものが書けないだろうか。テレビの栃木インタビューを見て、どうしても夕刊のノンフィクションを実現したいと思った。

浅草始発の快速に乗ると、まもなく小菅駅を通過する。小菅には、東京拘置所がある。元首相・田中角栄がここに入ったのは、暑い夏の盛りだった。四十三日間に八人の若い女性を殺して山中に埋めた大久保清が死刑に処せられたのもこの塀の中である。車窓から鉄格子のはまった灰色の建物と高い塀が間近に見える。栃木刑務所に行くときは、進行方向に向かって右側、帰りは左側、必ず東京拘置所の見える方に座った。同拘置所には、まだ刑の確定していない裁判中の女子被告もいる。彼女たちは、裁判が結審し、刑が定まれば、刑務所に送られる。そう思うと、この建物が、急に身近に感じられた。

栃木刑務所を何度か往復して所長の渋木多喜子から、とにかく文書にして具体的な取材目的や取材対象を出すように言われたのは一歩前進であった。だがそれだけで、担当の編集局次長に「やれる」と報告は出来ない。渋木に出す「取材許可願」の文を考えながら、なんとなくもやもやしているとき、気分転換に飲んだ外部の友人から耳よりの話を聞いた。友人宅の近所に法務省のトップから数えて何番目かの幹部が住んでいて、家族ぐるみで永年のつき合いをしているという。

その話に私は飛びついた。渋木には「マスコミの刑務所に関する取材は、一切出先にまかされていて、たとえ本省に行かれても関係ありません」と念を押されていた。ときによりけりだが、取材は、上を攻めたからといってうまくいくとは限らない。とくに、今度のような場合は、現場に反発を持たれればそれまでだ。法務省へ行くことは考えもしなかった。しかし、ここに、法務

省の最高幹部と家族づき合いをしている友人がいる。直接手を貸してもらわないまでも、何かいい知恵か参考になるヒントぐらい与えてもらえないだろうか。

十二月中旬過ぎの日曜日、私は、友人と一緒にミスター法務省氏を自宅に訪ねた。先入観がある。法務省の幹部というからどんないかめしい人物かと思っていたら、意外にざっくばらんな人だった。手短かにこれまでの経過を話して意見を求めた。

「女子刑務所は、栃木だけじゃありませんよ。ご存じでしょうねえ」

「ええ知っています。和歌山にも岐阜の笠松にあることも……」

「他に九州にも北海道にもあります。どうして栃木だけにしぼるんですか、取材対象を」

「別に理由はないんです」

たしかに、栃木にしぼる理由は何もない。しかし、どこの刑務所も似たりよったりだろう、漠然とそう考えていた。ミスター法務省氏が思いもかけぬことを言いだした。

「これはあくまで私の個人的な意見なんですが、全国五カ所の女子刑務所すべてを取材されたらどうなんです」

「五カ所全部なら取材可能でしょうか」

「さあ、それはわかりません。それぞれ出先の考え次第でしょうから。でも栃木だけ取り上げられて、たたかれても、ほめられても困るんですよ、当事者は。他に同じような施設があるわけですからね。五カ所すべてということになると、また考え方は違ってくる。役人の発想というのはそういうものなのです」

ミスター法務省氏は、それにしても渋木のばあさん、えらく渋ったもんだなあ、とひとり言の

ようにいい、声をあげて笑った。女子刑務所に通暁していることがその一言でわかった。

取材が軌道に乗ったのは、年が変わって、昭和五十七年二月はじめである。一番南の麓刑務所は、佐賀県鳥栖市にある。名前からしてどんな山深い所かと思うが、実際は福岡県との県境ぞいのなだらかな丘に建っている。福岡県久留米市から車で二十分の距離である。私は、この麓刑務所を振り出しに三カ月かけて北海道を除く四つの刑務所を回った（札幌刑務所女区は、新聞に連載開始後に取材した）。受刑者へのインタビューは、原則として一人十五分といわれたが、ほとんどが制限時間をオーバーし、中には延々三時間を超えたこともあった。

「相手が話したがらないことは無理に聞きません。十五分どころか十分でも五分でも終わります。ただし、受刑者が、自ら進んで話す気になってくれたときは、時間の制限をはずし、大目にみて下さい」

最初の麓刑務所で、インタビューに立ち会う保安課長・大森登美子に了解を求めた。その後、どの刑務所でも同じことを言った。

「おそらく、多くは語りたがらないと思います」

保安課長がそういう受刑者に限って、かえってよく話してくれた。彼女たちは、自ら犯した罪をいまさら思い出したくもない。話したくもないだろう。しかし、その半面、あのときのことを、詳しく、誰かに聞いてほしい、訴えたい、そんな気持ちもあるのではないか。

刑務所を次々めぐり、取材を重ねるごとに、少しずつ馴れていったが、最初の麓では、二日目にして、すっかりまいってしまった。その日、私は四人の受刑者にインタビューした。覚せい剤、窃盗、子殺し（無理心中）、夫殺し――。前日は、春のようにあたたかく、さすがに九州は、と思

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c